

エッセイ抄

男が女をみつめる時
お茶の水

五木寛之

男が女をみつめる時―エッセイ抄―

八八〇円

昭和五十四年四月二十六日 初版発行

検印廃止

昭和五十四年五月一〇日 十九版発行

著者 五木寛之

発行者 村川修二郎

発行所 主婦と生活社

振替 東京五一五八四四

印刷所 松濤印刷株式会社

第一興業印刷株式会社

製本所 若林製本株式会社

東京都中央区京橋三丁目五番七号 千一〇四
TEL 販売部(五六二)二六五一 編集部(二七一)一五三〇

©Hiroyuki Itsuki, 1979 Printed in Japan

(落丁・乱丁本は、お取替えいたします)

“まえがき”にかえて

五 木 寛 之

私はエッセイが好きだ。エッセイなどと気取らずに、雑文と呼ばれるたぐいの文章のほうが、もっと気に入っている。

ここに集められた雑文は、これまでに一冊の本になったそれらの文章の中から、任意に選出されたものである。いくつかは未刊行のものも加えられているが、いったん単行本となって世に送られた文章を、再びこういう形でまとめることには、ちょっと抵抗がないわけではなかった。

だが、編者の山本容朗氏や、出版担当者の皆さんの熱心なおすすめに、ついふらふらと一種アンソロジームいた文集を編んでみる気になったのは、作者の甘えからだけではない。

一枚のデッサン、一箇のガラス器が、置かれる場所と光線の当り具合いで、まったく別なもののように見えたりすることがある。そんな時、ふと、文章も周囲との関係、時代との交錯の中で違った顔を見せるものだということに気づく。

ここに編まれた雑文集は、そういったエディターと批評家の目によって、新たにコラージュされた一つの試みである。そこでは私の文章は素材に過ぎない。パッチワークという言葉に、私は或る親しみを感じているが、この端切を集めて作りあげた一冊の本の、本当の作者は編者と編集者たちだと言っても差支えあるまい。

歳月を経て、色あせた文章もあれば、自分のその時々の変化を如実に写し出している短文もある。それを素材に、どんなコラージュが編まれたかは、読者の皆さんの判断におまかせしたい。登場人物のかたがたと、装丁を引き受けてくださった灘本画伯に、心からお礼を申し上げますと思う。

それぞれの文章の冒頭に、それが書かれた時日がしるされているのは、私のささやかなアルバムのつもりだからである。

一九七九年 三月

横浜にて

男が女をみつめる時・目次

“まえがき”にかえて

I
〈女が男〉をみつめる時……………11

女が男をみつめる時

12

犬のいる風景

21

食い狂いの世代

26

わたしの嫌いなもの

34

続わたしの嫌いなもの

43

津和野の町のミニ

51

盲腸によせる妄想

59

メロンパン筆福事件

67

電話についての感想

75

ある冬の日

84

II 妖精と魔女の間

.....

麻生れい子

94

石岡瑛子

102

笠井紀美子

106

杉本エマ

111

鈴木いづみ

119

太地喜和子

121

中川久美

129

長嶺ヤスコ

131

奈良岡朋子

137

藤本晴美

140

マリー・ラフオレ

142

緑魔子

146

山口はるみ

151

吉田日出子

153

Ⅲ イメージの中の旅

.....155

明るい快適な場所

156

秋の日はあやしくも

164

ブブノワ先生のこと

172

冬の日の妄想

176

目の前がくらくなる

184

果して夜は明けるのか

193

金沢ゴキブリ旅行

202

夜の中を車で走るとき

210

下駄の鼻緒の煙の中で

218

IV

男と女の出逢いは偶然がいい〈対談〉……………233

恋愛に深刻さがなくなった

234

男っぽい女が好き

240

泣いた人は笑いの話を書きたがる

244

随筆のほうがナマの声が出る

251

男と女の出逢いは偶然がいい

255

編集 裝丁
山本 灘
容 本
朗 唯
人

男が女をみつめる時

I
へ女が男をみつめる時

女が男をみつめる時

一九七〇年五月

「虫が鳴いてるわ」

と、配偶者が言う。

配偶者とはつまり細君のことである。私はどういうわけか自分の細君のことを、女房、とか、家内、とか呼ぶ気がしないのだ。

妻、というのはそれ以上に苦手である。家人、というと何だか花伝書かでんしょでもひもとかねばならぬような気分になってくるから、これもまずい。

そこで最近、私の共同生活者のことを、配偶者、と呼ぶことに決めた。これなら妙に日常的、文学的な語感がともなわなくて具合がいい。サバサバしてて、しかも法律的にも正確である。もっともあまりにも無味乾燥でありすぎるといふ感じがしないでもない。

私の昨年の愛唱歌のひとつに、ちよびヒゲをはやしたレキント・ギターの奏者とそのグルー

プの歌う「君は心の妻だから」というやつがあつたが、この場合あくまで妻に限るのであつて、〈君は心の配偶者だから〉ではどうにもならない。

ところでその配偶者なのだが、毎日、私たちが深い眠りにおちいろうとする時刻、きまつて彼女はこうぐくのである。

「虫が鳴いてるわ」

鉄筋コンクリートの私たち二人の現住所は、下水の配管の音こそすれ、野の虫の鳴くような風流な家屋構造ではない。しかも秋深き頃なら迷い込んでくる虫もあろうが、今はいささか季節がちがう。

にもかかわらず、私の家では虫が鳴くのだ。それも毎日、きまつて私たちが眠りにつく頃から鳴き始めるのである。

何かこもった音でジジーと鳴き、時にはコウツコウツと聞こえることもある。その虫の音を聞きながら私は再び深い眠りに滑り込んで行く。私は今朝もいつもの通り、朝刊を読み、配達されたての新鮮な牛乳を飲んで一日の眠りについたので。目を覚ますのは、たぶん午後四時ごろになるだろう。

ジジー、コウツコウツとまた鳴いている。

鳴いているというより、なっているというほうが正確なのだが、私にはどうもそれが生きも

のの声のように思われて仕方がない。夢うつつの中で聞く虫の音というやつも、なかなか味わいのあるものなのだ。

「また鳴いてるわ」

と、配偶者が呟く。

「どうしましょう。出してやりましょうか」

「そうだな」

私は時計を眺め、ほぼ八時間ちかく眠ったことをたしかめて背のびをする。

「鳴いてるなあ。どこからだろう」

「今日もよく鳴きますね」

「よく鳴くなあ」

配偶者はあきらめたように居間へ行って何やらごとごとやっている。

のぞかなくとも私には彼女が何をやっているか手に取るようにわかる。なぜならば彼女は彼女の配偶者であり、十数年の共同生活のうちにその動物的、人間的習性をよくのみこんでいるからである。

彼女は押入れの戸を開けているのだ。そしてその奥深いところでジジー、コウツと鳴いてい